

原発の来た町

原発はこうして建てられた

伊方原発の30年

斉
間
満

はこの天理によりて戦うものにて、斃れてもやまざるは我が道なり。」

伊方原発を含め日本の原子力発電はエネルギー需要を満たすために必要だといわれる。その大義を振りかざす国の周りには、利権を求める集団や個人が集まり、権力・金力をふんだんに使って住民から土地と海を奪った。伊方原発は動きはじめ、そして今も動き続け、裁判も敗訴した。斉間さんが本書で詳細に、ある時は淡々と、ある時は怒りを込めて事実を書き留めているように、行政・議会・司法、そして警察・さらに学者までが一体となった原子力の推進は苛烈であり、住民の力はあまりにも弱い。刀折れ矢尽きるように、いや住民ははじめから刀も矢も持たず、ある時は警察に弾圧され、ある時はだまされ、ある時は私財を抛ったあげくに倒れていった。残った者も自分の命を削るように抵抗を続けてきたが、闘いの当初若者であった人々もいまや老年にさしかかってきた。

斉間さんは一九六九年伊方原発の誘致話が表面化して以降、ほとんど自らの一生をかけてこの問題に取り組んできた。新聞記者として、一人の住民として、裁判の原告として長い長い闘いであった。その彼も二号炉訴訟の判決を前に病に倒れ、本書は闘病中の力を振り絞っての刊行である。正造さんが最後まで闘いをあきらめなかったように、斉間さんの闘いも彼の生命のあるかぎりこれからも続くであろう。詳細な事実を記録し広く知らせるといふ本書のような闘いは、余人をもつて為しがたいものであり、斉間さんがこの時、この場所に生きていてくれたことをありがたく思う。

ただの庶民たちにとつて、苦難の歴史は今後も繰り返し、長く続くであろう。しかし、斉間さんが担ってきた闘いこそ「天理によつて広く教え」るものであり、「斃れてもやまざる」闘いである。斉間さんに幸あれ。伊方の住民たちに幸あれ。

二〇〇二年二月二十五日記

京都大学 原子炉実験所

小 出 裕 章

伊方原発誘致ドラマの幕開け

協定破りで記者クラブ締め出されるクラブの弱みをついた四電、町

四電は予備調済み

伊方町に誘致の動き



原子力発電所の建設地としてクローズアップされて伊方町九所第一号



山本伊方町長

1969年7月8日付 新愛媛新聞より
下の顔写真は誘致当時の山本伊方町長

四国の西の端、九州に向かって細長く豊後水道に突き出た佐田岬半島の中ほど、愛媛県西宇和郡伊方町に原子力発電所の誘致話が表面化したのは69年7月である。

当時、高知新聞が四国ブロック紙発行の野望を抱いて、隣接の愛媛県に乗り込んで子会社として創刊した新愛媛新聞が、7月8日付けの一面トップで報じた。それは、同町と四国電力の間で原子力発電所の設置問題がひそかに話し合われ、すでに用地買収交渉まで進んでいることを明らかにしたものだ。

トップ記事は、同紙の八幡浜支社長田中耕一郎さんの筆によるものだった。そして筆者は、当時同支社の駆け出し記者で、田中支社

長の指示で現地入りし8日付けのトップを飾った写真を撮り、現地の人たちの話を取るために取材に走った。

30年前、原発立地の白羽の矢が射たれ場所は、「鳥も通わぬ岬十三里」と語られた細長い岬半島の中ほどにあった。ヘアピンカーブが連続した、国道とは名ばかりの狭い道路からそして山道に入り、瀬戸内海側に越した崖っ淵の海岸だった。

そこには、山の中腹から海岸に向かって、崖沿いに這いつくばる様にして古い家が15戸ほど建っていた。ところが、明らかに人が住んで居るとみられた14戸は、戸口から中に向かって叫んでも応答はなかった。戸は開くが人影もなかった。やむなく、炉心予定地と見られる民家から300メートルほど離れた海岸へ行こうと雑木林に入

ると、そこでやっと畑仕事をして
いる男女に出会った。

「電力会社の人かと思った」と
筆者の姿を見て言った夫婦らしい
中年の2人は、ボーリング調査が
すでに行われていることを教えて
くれた。この時、すでに14戸は四
電と家屋の立ち退きに仮調印して
いた。しかし、四電は地元の人た
ちには何のための調査、仮調印か
は明らかにしていなかった。「何か
出来るのですか?」と、2人に逆
に問われた。

そして、「あっちの岸に行くのは
いいが、この谷はマムシが多いか
ら気を付けて」と、注意を一言付
け加えられた。とたんに筆者の足
はすくんだ。それまで、脛まであ
る雑草をかき分けて歩くのもなん
とも思わなかったのに、足が動か
なくなつた。

それでも、教えられたように拾っ

た木切れで雑草を叩きながらウサ
ギ道を歩き、急斜面の谷川沿いに
下り、やっと海岸に辿り着いた。
小石がしき詰まった海岸には、ボー
リング跡を示すクイが幾つかあつ
た。

「原子力発電所/伊方町に誘致
の動き/用地買収を始める/九町
越の約五十ヘクタール」7月8日
付けの新愛媛の記事は、同町だけ
ではなく周辺市町村、県下に大き
な波紋を起こした。一般住民だけ
ではなく、政界、経済界までも波
及していった。

四国電力の対応は素早かつた。
新愛媛が報じた8日、香川県高
松市の本社と愛媛県庁で、それぞ
れ「伊方町では、すでに土地条件
のあらしなどを専門家が調べて
いるほか、予備調査を始めている」
と、伊方町に原発建設の計画を進
めていることを表明。その時点で、

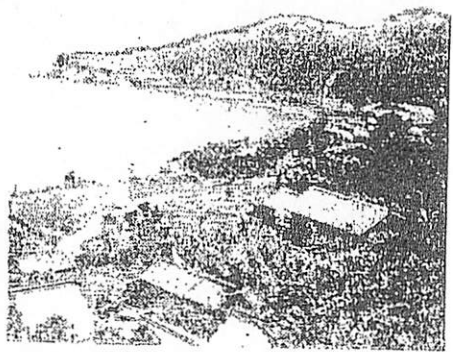
関係地主、漁協などと予備調査の
交渉を始めていることなどを発表
した。

しかし、同日、伊方町で記者会
見した山本長松町長は、関係地主
120人のうちすでに70人が、仮
契約を済ませていることを明らか
にした(29日付け朝日新聞は関係
地主129人のうち、110人が
土地売却の仮契約を承諾、と報じ
ている)さらに伊方町議会でも先
進地である福井県敦賀市に、視察
へ行く事を決めていた。

その後の伊方町、町議会の動き
も四電に劣らぬ素早い動きだった。
7月28日には臨時町議会を開き
「原発誘致」を満場一致で決める
とともに、「原発誘致特別委員会」
を設置対策費220万円を予算化
した。議会で明らかにした登記上
の地主は129件、うち条件付き
売買契約の調印を終了している者

は110件、対象面積は38万2
120平方メートル(総面積では
45万1360平方メートル)。

ちなみに、新愛媛が特ダネ報道
した2日後の69年7月10日付けの
朝日新聞は、当時の高田建一町議
会議員の「町議会でも1年ほど前
から話があったが、秘密に進めて
きた。いま表面化してしまうとは」



原発建設前の伊方町九町越し。入り江の向こう側の岬
の山を削って建てられた。

とのコメントとともに、「原発問題
の会合も関係ない別の名目で開く
という気の使いようで秘密を守っ
てきた」と、住民をカヤの外に置
いた体制で、原発推進を図ってき
た行政や議会、電力会社の姿勢を
明らかにしている。

また、10日付けの新愛媛新聞は
町見漁協組合の重岡太守組合長が
「4月ごろに町長から話があった。
町の発展を決める重大な事なので
賛成している」とも語っている。

トクダネで記者クラブ出入り禁止
に

ところが、一面トップのこの特
ダネ記事で、筆者や田中支社長ら
新愛媛は思わぬ荒波を被ることに
なった。

記事が報じられた数日後、新愛
媛の記者は当時八幡浜市役所の2
階、市長室前に在った八幡浜記者

室の出入りを禁止された。全国紙
や地方紙、テレビ局の記者で組織
する八幡浜記者クラブから、「謹
慎処分」を受けたのだ。

理由は「協定を破り、原発誘致
の記事を書いた」事だった。駆け
出しのペイペイ記者だった筆者は
事情がよくわからなかった。が、
協定は「町や四電の発表を待つ、
発表後各社が一斉に報じる」との
申し合わせだった。

四国で初めての原発誘致の話が
実現するニュースはネタとしては
大きかった。それだけに各社はそ
れぞれ独自に原発誘致の情報を得
ていた。しかし、全く秘密にされ
ていた訳ではない。すでに、新愛
媛新聞が特ダネに報じる前に、八
幡浜市内のローカル紙が、何度か
伊方町に原発誘致の動きが進んで
いることを報じていた。

ところが、どこでどう話し合わ

れたか、駆け出し記者の筆者には不明だったが日本新聞協会に属する全国紙や地方紙、NHKや民放テレビ局などの記者で組織する、八幡浜記者クラブは「県、町、四国電力の発表をもって報じる」趣旨の申し合せがなされていた。

ただ、当時の記者クラブ員たちを弁明すると、彼らも指を食わえてじっと待っていた訳ではない。それなりに町や四電に対して、計画や土地買収の動きを取材したり、町や四電に報道解禁時期をつづいていた。が、それは断片的のものにすぎなかった。

田中支社長もそうした動きをしていた記者の1人だったが、ある日、「町や四電の言うままでは、原発が出来てしまう。もう、土地の買収交渉に入っている」と、怒ったように語った。そして、部下である筆者に建設予定地の現地の写

記者は歴史の証人

ただ、当時の八幡浜記者クラブに席を置いていた記者たちの名譽のために付記しておく、彼らは四電や行政の側にドツプリと浸かって、原発誘致の動きを軽視していた訳ではなかった。それは、表面化した後の原発報道を追いかけていけば、当時の記者の奮闘ぶりが見えてくる。

その一例を紹介する。73年2月24日付けの毎日新聞は、賛否両論が激しかったころの警察の姿勢を次の様に報じている。

「過去4年近く、毎日警備員を伊方番々に出して、反対派の動きを克明にチェックし四電と一体」

真と地元の人たちの証言を取材する事を指示した。

田中支社長の予感的中していた。前記のごとく、新愛媛が書いた時点では原発誘致のニュースは伊方現地ではすでに古くなっていた。記者クラブは町と四電にまると一杯食わされたのだ。いや、町と四電はクラブの協定というしがらみに縛られ、そして発表報道に浸っていた記者クラブの弱味を、みごとに突いたと言うべきなのだろう。

話は少しさかのぼる。四国電力の伊方町への原発建設計画が表面化する2年前の67年、四電は伊方町から約50キロ南の北宇和郡津島町の大浜海岸を原発建設予定地に上げていた。ところが、激しい住民の反対運動に合いボーリング調査までしながら「地質が悪い」こ

伊方町職員の暴行事件の同署の処理、四電原発準備所職員と同署幹部や警備課員とのなごやかなつながりを見てきた人たちは、「警察は中立」と額面通り受け止める事は出来ぬだろう」と書いた。

これには、当時の八幡浜警察署長の渡辺保さんが「こんな記事を書かれると困る」と、菅田記者に噛み付いた。ところが、菅田記者は負けてはいなかった。

「ウソを書いていますか。書いていたら、(毎日新聞社の)何処にでも抗議して下さい。中立を疑われる警察の姿勢の方が問題でしよう」と、逆に食ってかかった。

後述しているが、町見漁協の海売渡の総会報道でも見られる様に、当時の記者たちは不正なやり方は許されないと姿勢で、体当たりで取材した。四電に抗議文を突き付けたのは数知れない。

とを理由にして、68年1月12日に断念表明していた。

その時は、四電、津島町とも早くから原発建設計画を公表していた。断念せざるを得なくなったのは、早すぎた公表が住民の反対運動を強固にしたという反省があった。この津島町の撤を伊方町では踏まないために、四電、行政側はマスコミ対策を綴ったのだと語られた。その結果が、「マスコミと申し合わせ、秘密裏に進める」とこ

とだった。

話を元に戻す。
記者クラブ出入り禁止処分を受けた筆者は、ビールケースを持って各新聞社、テレビ局の支社や通信局を回った。協定を破ったお詫びだった。そして、当時、クラブで一番若輩者だったこともあって、筆者は新愛媛のライバル紙愛媛新聞の記者に、何かと雑用をさせら

71年4月、四電が資材運搬用の道路を農地転用許可も出さずに行っていたのを暴いたのも、記者クラブの面々だった。権力や大企業の不正や不法に厳しい姿勢を見せていた。少なくとも当時駆け出し記者の筆者にはそう映っていた。

こんなエピソードも記憶している。年月日は忘れたが、記者クラブの数人の記者たちが、当時は「バー」と呼ばれる馴染の飲酒店で騒いでいた。そこへ、四電伊方原発建設準備所PR課の小野道男課長たちが入ってきた。軽く挨拶したが、お互いに別々の席で杯を交わしていた。

問題が起きたのは記者クラブの面々が勘定を払う段階になってだった。

店側が「戴いています。先ほど出て行った四電の人に」と、支払の受取を拒否した。とたんに、記

者たちの顔色が変わった。

翌日、八幡浜市昭和通りの四電八幡浜営業所裏にあった原発建設準備所へ毎日新聞の菅田、朝日新聞の安延、南海放送の河田記者らが押しかけた。応接室で対応した小野PR課長の目の前のテーブルの上に、「酒くらい自分の金で飲む。バカにするな!」と彼らはお金を叩きつける様に置いた。

先輩記者たちの尻にくっついて同席していた筆者は、その時の光景を30年経った今も記憶している。先輩たちの怒りの姿が、四国の片田舎で記者を続けてきた以後の筆者の人生に、少なからず影響を与えたと言えればおかげさだろうか。

しかし、こうした記者たちも、記者クラブという得体の知れない組織に、自らを縛り付けていた事に気付かなかつたのだ。そしてそ

海は奪われた 漁協総会のでんまつ(その一)

原発を建設するには、土地とともに海を買い取る(漁業権)ことが必要だった。原発は、膨大な量の温排水を、捨てなければいけないからだ。ちなみに、3機の伊方原発が排出している温排水の量は、毎秒141トン。これは四国で最大の流量を誇ると言われる徳島県・吉野川の水量と匹敵する。大量の温排水をタレ流されると、海は環境の変化を起こすのは当然だと言える。それは同時に、その海域で何百年も前から生活の糧を得ている漁師にとっては死活問題となる。

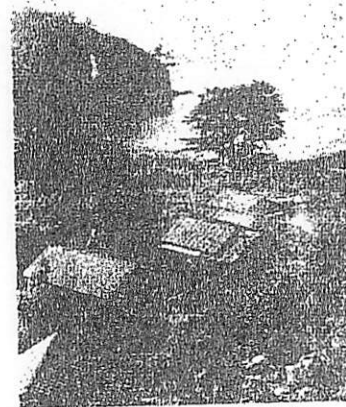
四国電力が伊方原発建設計画で、漁業権放棄を求めた海域は、漁業権消滅海域が16万5千平方メートル、埋め立て部分は5万4千平方

うした記者クラブのあり方が、結果的には住民を無視した中で、原発を誘致することを容易にさせた

とも言えたのだ。伊方原発誘致のドラマは、こうした中で幕が開いた。

地元は歓迎機運 町議会に真重論

1994.7.10 東条 俊之 文相



原子力発電所建設候補地の伊方町九町域の一部。すでに漁業は立ちのき収束的に印刷した

原子力発電所誘致の伊方町

近く先発 県を視察

町議会の方針
伊方町は、出羽地方の原子力発電所誘致の候補地として、県を視察した。伊方町は、出羽地方の原子力発電所誘致の候補地として、県を視察した。伊方町は、出羽地方の原子力発電所誘致の候補地として、県を視察した。

立ちのき仮契約へ

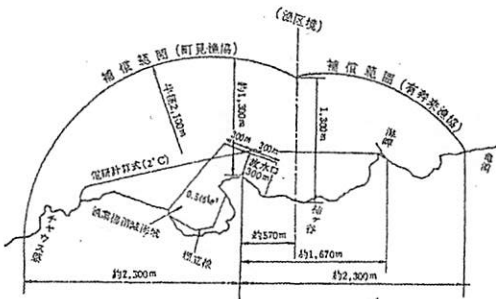
14戸すでに調印

伊方町は、出羽地方の原子力発電所誘致の候補地として、県を視察した。伊方町は、出羽地方の原子力発電所誘致の候補地として、県を視察した。伊方町は、出羽地方の原子力発電所誘致の候補地として、県を視察した。

1996年7月10日付新愛媛新聞

メートル、漁業権制限海域39万平方メートル、合計すると60万9千平方メートルに上る。そして、温排水の影響部分は440万平方メートルの海域に至る。

この海域は、伊方町の町見漁協と有寿来漁協の2つの漁協が漁業



1・2号機の漁業補償範囲(濁水による補償範囲を除く)

「伊方町誌」(昭和62年発行)より。

権を持っていた。その中でも町見漁協が漁業権を持つ海域は、漁業権消滅海域など34万平方メートル、温排水の影響海域は280万平方メートルを有していた。つまり、町見漁協が漁業権放棄することを拒否したら、原発建設は実現しなくなるのだ。それだけに、四電側にとって、漁協に漁業権放棄をさせること、海を買い取ることは、建設予定地の買収とともに最大の課題だった。

一年間に三回も総会開く

伊方原発建設計画が表面化した翌年(71年)、町見漁協理事者は、4月24日、10月12日、12月26日と1年間に3度の総会を開いた。

わずか1年間に3度も総会を開くのは異常な事態だった。異常な事態が起きたのは、定期総会で「原発絶対反対」を決議した組合員の

今の状態では賛成者が脱落してい
くであろう」。

「決議方法を記名投票にすれば、
総会召集請求署名者については、
中心者において責任を持てるので、
必要数を確保でき次第、なるべく
早く臨時総会を開くべきである。
小さい部落へひんばんに会社の人
が来ることは、かえってマイナス
（反対派をしげき）であり無益だ。
（鳥津、加周、田之浦）」「最終的
には組合員の2/3以上の賛成を
必要とするが、現状では非常に困
難と思われる。これを確保するた
めには、先ず原電設置反対を賛成
に変更させる必要がある」など、
10項目。

それは、反対漁業者への対策と
臨時総会乗り切りへの意見である。
注目されるのは、この時点（8/
9・11・10月12日の臨時総会の2カ
月前）で、反対者が多かったが、

それを突破するためには、臨時総
会を「原電設置反対を賛成に変更
させる必要がある」と記している
点である。

71年4月、定期総会で決議した
「原電絶対反対」を、10月12日に
「原電設置賛成」に「転覆」させ
るためのシナリオ作りは、定期総
会後から進められていたことを明
確に示す文書だった。議案も上程
されず、その上会場外から県職員
が指示し、強行採決され、そして
強行に原電設置賛成が可決された
10月の臨時総会は、現状では困難
と思われる反対多数を、「賛成に変
更させる必要」から仕組まれた総
会だったのだ。

反対派組合員が、県に訴えた「町
見漁業協同組合臨時総会並びに決
議に対する異議申請」は、虚しい
訴えでしかなかったのだ。

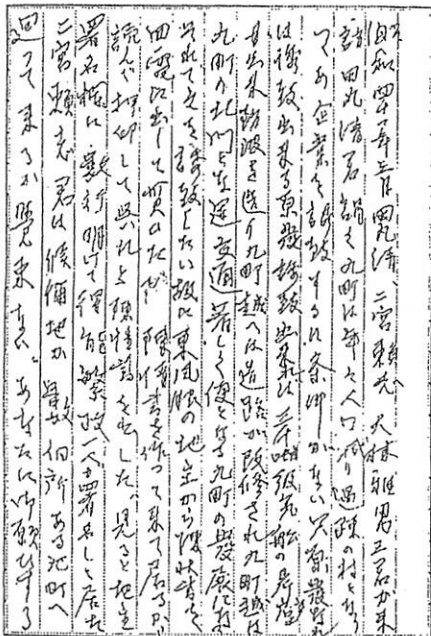
原発が来た町の最初の犠牲者

原発建設用地の土地買収問題が
起きていた時代、特筆しておか
ねばならない事件がある。井田キク
ノさんの自殺である。

原発立地計画場所の同町九町越
しに広大な土地を所有する井田さ
ん一家は原発が来た町の最初の犠
牲者である。それはキクノさんの
死だけにはとどまらない。夫婦、
親子の絆を切り裂いていった。原
発建設計画を押し進める者たちが、
地元の人々の心や生活をどれだけ
傷つけ、踏みにじってきたかの不
幸な証だった。そしてそれは、原
発の町の人々の将来を暗示した事
件ともいえた。

原発に最初に殺された住民

伊方町議会が、原発誘致を決議



井田与之平さんが四電の悪といやり方を訴えたビラ

つけた。
八幡浜警察署の調べでは自殺と
見られた。

して4年後の73年4月のことであ
る。
20日午前9時ごろ、西宇和郡伊
方町九町の井田キクノさん（当時
72）が、自宅納屋でナイロンテー
プで首を吊って死亡しているのを、
夫の井田与之平さん（同83）が見

当時の毎日新聞（73年4月21日
付け）は、自殺の理由を次の様に
報じている。「井田さん方は伊
方町の資産家。現在四国電力が同
町九町越に建設を急いでいる伊方
原子力発電所用地の地主の一人。
与之平さんは建設反対派で、用地
売渡を求める四国電力
の要求を拒否、四電の
買収工作が激しくなっ
た46年（注・71年）初
めから同町町見（注・
伊方町九町）の人たち
と「自然を守る会」を
結成、同地区の原発反
対共闘委（川口寛之委
員長）の人たちと原発
反対運動を続けている。
また、与之平さんは町

村合併前の町見村長をしていたこともあった。

ところが、45年(注・70年)春、キクノさんは夫の与之平さんが建設反対派であることを知りながら、再三にわたる土地売渡要求に反対しきれなくなり、自分名義になっている土地15・300平方メートルを売り渡すことにし、土地契約に押印した。

与之平さん夫婦はこれがもとで夫婦仲が急に悪化、キクノさんはいたたまれなくなり、47年(注・72年)1月、与之平さんと大げんかして家を飛び出し、愛知県東海市に住む3男、Hさん方に居候。別居生活をしていたが今月17日にひよっこり伊方町に帰ってきた。

(中略) けんかするまで老夫婦だけで生活をしていた。近所の人の話では、『夫の意思に反して四電に土地を売り渡したことや裏切りにキクノさんを匿っていたことを明らかにしていた。』

文中には、与之平さんが原発誘致当初、「不本意ながら一度調印してしまった」と、自らの過ちをも明らかにしていたが「四国電力の繁栄と人間生命と、どちらが大切なのか?」「妻は四電と、町長とその手先によって殺されたのだ」と、痛烈な文章を書き記している。

与之平さんは伊方町に原発建設の話があった当初は、原発予定地の地主たちで結成していた地主会の会長だった。が、その後、原発の危険性を知るに至って原発の安全性に疑問を深め、実弟川口寛之さんが会長を務める伊方原発設置反対共闘委員会に加わり、反対運動を始めた。

キクノさんの死は、与之平さんにとっては、原発神話に疑問を抱き始め賛否の狭間に立っていた時

者と町民から陰口をたたかれていたことから、それを苦にしたものだ』と話しており、妻の死に驚いた与之平さんは『四電に殺された。土地は絶対に取り戻してみせる』と涙ながらに訴えていた。

与之平さんは事件後、「皆さん聞いて下さい!妻が自殺した真相はこうなのだ!」と、題した事件の真相を訴えるピラを作り、町民らに四電の悪どいやり方を訴えた。B四版のざら紙には2200文字を使って、四国電力がキクノさんに取り入ってきた経過などを、次のように書き記していた。

「四国電力は『土地代は反当たり7万5千円、其以上の金額協力費で井田さんのように原発反対では結局収用法の適用になるでしょう、そうなったら反22万円は貰えない。土地代7万5千円以上会社は出さないから今の中に印を押し

代だった。そうした時の妻の死だった。』

しかし、与之平さんは負けてはいなかった。自殺の真相を書いたピラを作り、四電の悪どい手口を町民に訴えて回った。悲しみを力にしようと思死だったのだ。

反対運動に加わった後も、伊方原発1号、2号炉の設置許可取り消し訴訟の2つの裁判の原告になって、90年6月3日百歳で亡くなるまで、不法で卑劣な方法で伊方町に原発設置を許した国と、法廷で争った。

読書家だった与之平さんは、妻を亡くした後は一人暮らが続けていたが、生前、筆者に「騙される方も悪いという者がいるが、騙すことは人を死に至らしめる事にもなる。それでも、騙された方も悪いと言うのか」と、語った。ちなみに、与之平さんの撒いたピラ

て22万円貰ったが得で、今日の規則では各人の名義の財産は主人の承諾を得ずとも処分出来るのであるから主人の帰らぬ間に」と執拗に売却を強要され其気になって薦められるままに主人に無断売却したのが離別にまで発展したのであります。

キクノが家を出る時荷物の運搬車の世話など一切、A(原文は実名で、原発推進派の地元住民)がしたとの事である。そして四国電力はキクノを指定旅館清風荘にかまったのである。

四国電力は私の家庭を破壊しても自己の目的さえ達せば人はどうでもよいと云うその我利的悪辣さ大企業とも思えぬ卑劣さである。高等の学府を出た人は高い道義心と且つ人の師表たる義務があると私は考えて居た」

四電が地元の推進派住民とともに

は次の様に書いている。

「孟子は人を殺すには兵を以てすると政を以てすると其殺はひとつであると云っている。自ら手を下さずとも死に追い込んだ者は其者を殺しているのである。井田キクノは自殺した。しかしこれは四国電力と其走狗共に殺されたのであると私は断ずるのである」

キクノさんは、伊方原発(四国電力)が最初に死に至らしめた人だった。(内の注は筆者の加筆)

原発の来た町
原発はこうして建てられた

伊方原発の30年

2002年5月27日 初版

著 者 齊 間 満 (さいま みつる)

印刷/発行 南海日日新聞社
〒 796 - 0047
愛媛県八幡浜市白浜通り2
TEL 0894(24)3674・FAX・TEL兼用(24)2316
メール nichinch@dokidoki.ne.jp
ホームページアドレス
<http://www.hime.ne.jp/~nankai/>